

テーマ：エリスを失って以降の豊太郎の心の変化を「詩」で辿ろう！

## 序論

＜テーマ設定の動機＞

僕は、本文を一通り読み終えて、違和感を覚えた。

なぜなら、豊太郎がエリスを失った原因は、彼自身にある様に思えたけれど、彼自身はそう思っていないからだ。実際、彼が感じていたのは、罪悪感ではなく、相澤への「恨み」であった。この「恨み」という感情が掴みにくく、またそれがもどかしかったので、彼の心の変化を辿ることで、理解したいと思った。

しかし、それだけではつまらないと感じたので、それを「詩」で表現しようと思った。

なぜ、「詩」と言う形式なのか疑問に感じる方もいるだろう。

しかし、「詩」は、心の様子を表現するのに適している。

そして、詩を書いたのは、小学校以来ないので、敢えて自分の表現力の成長を確かめる意味でも挑戦してみようと思った。

＜結論として、どのようなことを述べるか＞

エリスを失ってからの豊太郎の気持ちの流れは、

悲しみ——→悲しみが強まる——→罪悪感——→相澤を憎む気持ち

(合理化)

上記を、根拠を踏まえて、検証した上で、「詩」で表現する。

## 本論

＜作品の概略＞：「大修館近現代文学辞典」より。本文の内容説明箇所のみ引用開始。

「ベルリンに留学した青年官太田豊太郎は、大学の自由な雰囲気に触れ、封建的な官僚機構と「家」に縛られた自分の生き方に疑問を持つ。やがて、踊り子エリスと愛し合うようになり免職される。友人の尽力で日本での社会復帰の機会を得て、出世か愛情か苦悩するが、豊太郎は帰国を選んだ。」 以上、引用終了。

ここで、上記事項に更に内容を補足すると友人にあたるのが相澤であり、少なくとも大学以来の友人であることが確かである。また、彼の子を身籠っていたエリスは、彼が自分より出世を選んだことに、精神的に打撃を受け、発狂し、精神は殆ど崩壊してしまった。

更に言うと、本作品は、額縁構造をとっている。つまり、主人公の現在の様子が描かれた後に、主人公が回想し、また現在へと時間軸が戻る仕組みである。

具体的には、冒頭部でエリスを失いベルリンから日本へ帰国する豊太郎が、気持ちの整理

をつけようと、当時を回想し、最終部で、気持ちの整理をつけそれを吐露する。

<主張の根拠～本文～>

「第一学習舎 高等学校 現代文」より。

また、①②③④といった記号を、私の論展開の都合上付加している。冒頭部より引用開始。

「①この恨みは初め一抹の雲のごとく我が心をかすめて、瑞西の山色をも見せず、伊太利の古跡にも心をとどめさせず、②中ごろは世を厭い、身をはかなみて、腸日ごとに九回すともいふべき惨痛を我に負わせ、③今は心の奥に凝り固まりて、一点の影とのみなりたれど、文読むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に応ずる響きのごとく、限りなき懐旧の情を呼び起して、幾たびとなく我が心を苦しむ。ああ、いかにしてかこの恨みをせうせん。もし他の恨みなりせば、詩に詠じ歌に詠める後は心地すがすがしくもなりなん。これのみはあまりに深く我が心に彫りつけられたればさはあらじと思えど、今宵はあたりに人もなし、房奴の来て電気線のかぎをひねるにはなほほどもあるべければ、いで、その概略を文につづりてみん。」 以上、引用終了。

本文最終部分より引用開始。

「④ああ、相澤謙吉がごとき良友は世にまた得難かるべし。されど我が脳裏に一点の彼を憎む心今日までも残れりけり。」 以上、引用終了。

<読み取れる事>（上記<主張の根拠～本文～>より。）

・ （冒頭部①②③より）彼の気持ちは、段々ひどくなっている。

観点一：具体的に言うと、**頻度**が増している。（冒頭部①②③より）

①時おり→②日ごと→③常に（なにをするにしても）

観点二：また、**強度**も増している。（冒頭部①②③より）

①美しいものを見ても、心を動かされる余裕がない。或は、そういう気分になれない。

→②世の中が嫌になり、自分を惨めに思っている。また、激しい苦しみを感じている。

→③他に何も考えられず、混乱してひどく不安定である。

・ （最終部④より）もやもやしていた、気持ちがはっきりと形を帯び、回想を通じて、強固になっている。

<仮説とその検証>

仮説～エリスを失ってからの豊太郎の気持ちの変化の様子～

悲しみ——→悲しみが強まる——→罪悪感——→相澤を憎む気持ち

(合理化)

さて、先ず豊太郎がエリスを失って「悲しみ」を感じていたか、どうかから始めよう。

悲しみ——→悲しみが強まる——→罪悪感——→相澤を憎む気持ち

(合理化)

①～②の部分では、「美しいものを見ても、心を動かされる余裕がない。或は、そういう気分になれない。」と読み取れたが、もう一度本文の該当箇所を見てみよう。

雲が心を覆い、美しい景色を見る眼が霞んでいる。しかし、心は、別の所にあることが分かる。注意したいのが、「眼が霞んでいる」という箇所である。この理由は？もちろん、涙で眼が霞んでいるのだと十分推測できる。人は、いつ涙を流すか？これは、概ね悲しい時である。よって、豊太郎はエリスを失って「悲しみ」を感じていた、と言える。また、本文の中盤で、豊太郎は、自分自身を心が弱いと語っており、日本からベルリンへ旅立つ際にも涙を流している事からも、真の彼は、ただ機械的で何の感情も感じない人間ではないから、これを肯定する。

次に、悲しみが強まったか？考えよう。

悲しみ——→悲しみが強まる——→罪悪感——→相澤を憎む気持ち

(合理化)

②の部分から、「世の中が嫌になり、自分を惨めに思っている。また、激しい苦しみを感じている」ことが読み取れたが、もう一度①②とその流れを確認すると、前記の通りに、頻度が～①時おり→②日ごと～に増している。(冒頭部①②)

また、強度も～①美しいものを見ても、心を動かされる余裕がない。或は、そういう気分になれない。→②世の中が嫌になり、自分を惨めに思っている。また、激しい苦しみを感じている。～増している。(冒頭部①②)

以上から、「悲しみが強くなった」事が、確実に分かる。

次に、「罪悪感」を感じていたか、考えよう。

悲しみ——→悲しみが強まる——→罪悪感——→相澤を憎む気持ち

(合理化)

③の部分の「鏡に映る影」がポイントだ。

本来、鏡に映るのは、自分の姿であるが、それを「影」だと書いている。

影は、光によって、そのものの他に出来る、その物の姿であるから、豊太郎が持つべきであるが、それが本文中に直接表現されていないもの、つまり、罪悪感である可能性が高い。

次に、罪悪感が合理化され、相澤への恨みへと変化したことを考えてみよう。

悲しみ——→悲しみが強まる——→罪悪感——→相澤を憎む気持ち

(合理化)

合理化の直接の根拠は、本文には無い。しかし、一般的な議論の場に根拠を見出せると思う。自分の過失で愛する人を失うよりも、誰か人のせいにする方が楽だからだ。

以上を持って、仮説の検証を終える。

仮説～エリスを失ってからの豊太郎の気持ちの変化の様子～

悲しみ——→悲しみが強まる——→罪悪感——→相澤を憎む気持ち

(合理化)

ここに、私の仮説は、根拠を伴い、「舞姫」に関する文芸評論家の方々の諸説の仲間入りを果たしたと言えるだろう。それらに比べると大分お粗末だが。

<メインテーマ「詩」による表現の試み>

舞姫                      内谷 優作

霞みたり。

瑞西の山色 伊太利の古跡

彼は外物にあらじ 余を襲うまじ

迫り来たれり。

乳のごとき白雲

彼は色を失わじ 余のみを覆う

凝り固まれり。

一点の黒

彼は鏡に映る影 余を憎むべし

振り返れり。

我

彼は旧くからの友 余を助けり

されど恨む他なし

<よく分からなかった事>

構成上無くても良いと評価されるかも知れないが、<作品の概略>を載せた。

これは、仮説の検証を進めるにあたり、「舞姫」に関する前提を読者と共有する為であったが、果たしてその意図が読者に明確に伝わっているか、疑問に思った。

また、その際述べた「額縁構造」の意図及び、効果については、作品の内容同様に、「舞姫」

に関する前提を読者と共有することが意図としてあったわけだが、論展開という観点からすると脈絡のない記述の様に読めるかも知れない。書く分量が長くなると、自分の記述全体に淀みない流れを持たせるのが、非常に難しいと痛感した。

<参考にしたもの>

「大修館近現代文学辞典」「第一学習舎 高等学校 現代文」

<～終わりに～詩の解釈の解説>

涙で眼が霞んでいる。

かつては自制してまで、惹かれまいとした素晴らしい景色にさえ、何の感慨も受けない。

しかし、忘れようとしても、彼女のことが忘れられない。ああ、あの色鮮やかな日々。  
彼女の肌の色のように目の前が、真っ白になり、私は世界から孤立している。

罪悪感が我が心を痛めつけ支配する。ああ、苦しい。

過去を振り返ってみた。辛いけれど。相澤は、助けてくれた。

しかし、彼は彼女を殺したのだ。

(注) 詩中の表現について、

外物?→外の世界の事。豊太郎にとっては、誘惑多き断つべき世界を意味していた。

彼?→全て、「か」と読み、「あれ」という意味。特定の男に用いる代名詞ではない。